

平成 22 年(2010 年)5 月 1 日(土)
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

春日北遺跡現地説明会資料

1. これまでの状況

春日北遺跡は、春日集落北方の丘陵斜面(名神竜王カントリークラブの管理施設付近)から 30 年ほど前に緑釉陶器片や窯道具が採集されたことにより、平安時代中期(10 世紀)の緑釉陶器窯が存在することがわかりました。

この近接地において、県道水口竜王線の道路改良工事が計画されたため、平成 21 年 4 ~ 5 月に試掘調査を実施したところ、工事範囲内に窯跡が存在することがわかりました。

同年 7 月 ~ 11 月に行った発掘調査では、緑釉陶器窯 1 基(1 号窯) 灰釉陶器窯(2 号窯) 1 基が検出され、とくに緑釉陶器窯 1 号窯が良好な状態で遺存していました。このことから 1 号窯は、工事関係部局および地元の方々のご理解・ご協力により、工事計画を変更して現地保存されることになりました。

ところが、1 号窯・2 号窯の発掘調査終了後の平成 22 年 1 月、道路工事中に 1 号窯前面の道路下から焼土や灰が出土しました。急遽確認調査を行ったところ、4 基の窯跡(3 ~ 6 号窯)とこれに付属する灰原が遺存していることがわかり、同年 3 月から 3 ~ 6 号窯の発掘調査を実施しています。



遺跡位置図

2. 調査の概要

昨年度からの発掘調査で緑釉陶器（緑色の釉をかけた陶器）窯5基、灰釉陶器（白色の釉をかけた陶器）窯1基がみつかりました。そのうち緑釉陶器1号窯については平成21年9月22日に緑釉陶器窯1号窯現地説明会を開催しました。

各窯跡の概要はつぎのとおりです。

1号窯

緑釉陶器を焼いた窯で、焚口から奥壁までの全長2.7m、燃焼室（薪を燃やす部分）の長さ1.2m、陶器を焼き上げる焼成室の長さ1.5m、焼成室の最大幅0.9mの規模です。

燃焼室の底面は奥へ向けて傾斜します。焼成室はほぼ平坦につくられており、床下に3本の分焰（ぶんえん）溝と2本の分焰壁（アゼ）で焰を通す構造（有牀〔ゆうしょう〕式）を備えています。

時期は10世紀後半です。

2号窯

おもに灰釉陶器を焼いた窯で、緑釉陶器も少量生産していたようです。1号窯の南東30mの丘陵先端部にあります。斜面に直交して築かれた窯窓（あながま）で、検出されたのは焚口に近い部分とみられます。遺存状態は悪く、窯の床面だけが残っていました。

窯の規模は、幅1.5mくらいで、長さは確認できません。床面の勾配は30°です。

時期は10世紀前半です。

3号窯

緑釉陶器窯で、焼成室は失われており、燃焼室だけが残っていました。

燃焼室は幅0.85m、長さ1.3mの規模で、焼成室の床下に設けられた2本の分焰壁の端がかろうじて遺存していることから、1号窯と同様の有溝有牀式構造であると考えられます。

時期は10世紀後半で、4号窯と同時に操業していたと考えられます。

4号窯

緑釉陶器窯で、燃焼室の底面のみ残っていました。

燃焼室の幅0.8m、長さ1.0m以上です。焼成室の構造は1号窯と似たものと推測されます。

時期は10世紀後半で、5号窯に後出し、3号窯と同時に操業していたとみられます。

5号窯

緑釉陶器窯で、燃焼室の底面のみ遺存していました。

燃焼室の幅0.5m、長さ1.0m以上です。焼成室の構造は不明ですが、1号窯と似たものと推測されます。

時期は10世紀後半で、6号窯に後出し、4号窯に先行します。

6号窯

緑釉陶器窯ですが、灰釉陶器と同様形態の陶器も出土しています。

幅2m、長さ1.5mの楕円形に検出されました、深さは5cmほどの遺存状態で、奥側半分が削平されているとみられ、もとは平面形が三角形状であったと推測されます。

斜面下方からみて、左右の2力所の底面が若干深く窪められ、この部分が強く焼けていることから、二つの焚口を備えた構造と考えられます。

底面には強く焼けた柱状の粘土塊が何本も立てられており、この柱の上に焼成室の床を構築していたのではないかと推測されます。つまり、焼成室と燃焼室が上下に重複する上げ床構造（有牀式）であったと考えています。

時期は10世紀半ばとみられます。

3. 現時点での調査成果

(1) 窯跡の変遷

見つかった6基の窯跡の変遷は次のように考えています。

2号窯（10世紀前半。灰釉陶器と一部緑釉陶器を焼成。窖窯）

6号窯（10世紀半ば。緑釉陶器窯。三角形有牀式窯）

5号窯（10世紀後半。緑釉陶器窯。有溝有牀式か）

4号窯（10世紀後半。緑釉陶器窯。有溝有牀式か）

3号窯（10世紀後半。緑釉陶器窯。有溝有牀式）

1号窯（10世紀後半。緑釉陶器窯。有溝有牀式）

1号窯と他の窯との重複関係は確認できていませんが、1号窯が3～6号窯の斜面上方に位置していることから、現時点ではもっとも新しい窯と推測しています。

つまり、10世紀前半から後半にかけての60～70年間に6基の窯が順次操業し

ていたことになります。各窯の操業期間は10年そこそこのものであったと考えられます。

(2) 2号窯の意義

2号窯の発見は、これまで東海地域で独占的に生産されていたと考えられていましたが、近江においても生産されていたことを証明するものです。出土した灰釉陶器の形態は尾張（愛知県）地域のものと酷似しており、10世紀前半における東海地域から当地への工人の移動がうかがえます。

また、本窯で焼かれた緑釉陶器は、近江産緑釉陶器の最古段階のもので、近江地域における緑釉陶器生産の初期段階の様相を考えるうえで重要です。

(3) 6号窯の意義

6号窯は平面形が三角形になると思われ、二つの焚口を備えます。また、燃焼室の底面に柱を立ててその上に焼成室の床を張って陶器をあぶり焼く有牀式構造のものです。このような構造をもつ緑釉陶器窯は、京都府亀岡市に所在する篠窯跡群でしか確認されていないものでした。6号窯の発見は、10世紀半ば段階における京都と近江の工人や技術の交流をうかがわせます。

(4) 1・3～5号窯の意義

1・3号窯は焼成室と燃焼室が別に備えられ、焼成室の床下につくられた2つの分焰溝に焰を通して陶器をあぶり焼く有溝有牀式構造を備えています。

4・5号窯についても同様の構造であった可能性が考えられます。また日野町のある作谷（つくりや）窯跡も似た構造のものです。このような構造は近江地域しか確認されていません。

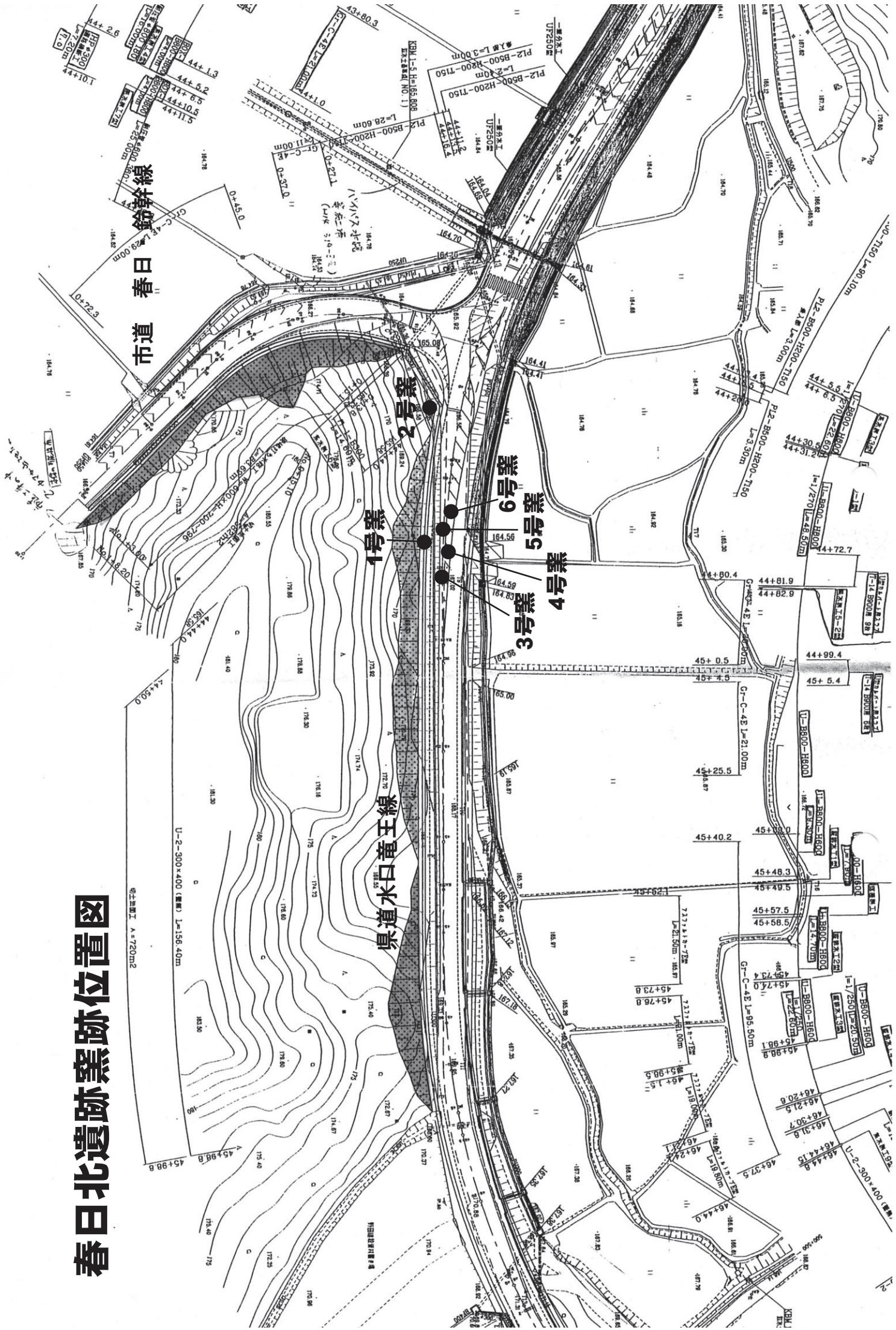
これらの窯は10世紀後半に操業していたもので、この頃近江においては、独自の構造をもつ窯で緑釉陶器が焼かれていたことがわかりました。

また、10世紀後半段階の窯跡が密集して発見されたことも大きな意味があります。近江産緑釉陶器の一大消費地は平安京と考えられています。大阪大学の高橋照彦准教授の研究によれば、平安京出土緑釉陶器の9割が畿内産と近江産が占め、畿内産が主流であるのは近江産が出現する10世紀前半までであり、10世紀後半には近江産がほとんどを占めるようになります。すなわち、10世紀後半段階の近江産緑釉陶器の供給量は膨大なものであり、近江がかなりの量産化体制を整えていたはずです。

今回、10世紀後半代の4基の緑釉陶器窯1・3～5が近接して発見されたことは、当期における近江産緑釉陶器の量産体制の状況を具体的に示す事例として重要です。

以上のように、春日北遺跡の6基の緑釉・灰釉陶器窯の発掘によって、近江産緑釉陶器生産の初期段階の様相や、独特の有溝有牀式構造をもつ窯による量産体制のあり方の一端が明らかとなりました。

春日北遺跡黒跡位置図





調査地遠景



1号窯



1号窯の復元イメージ



2号窯



3~6号窯



3号号



4号窯



5号窯



6号窯